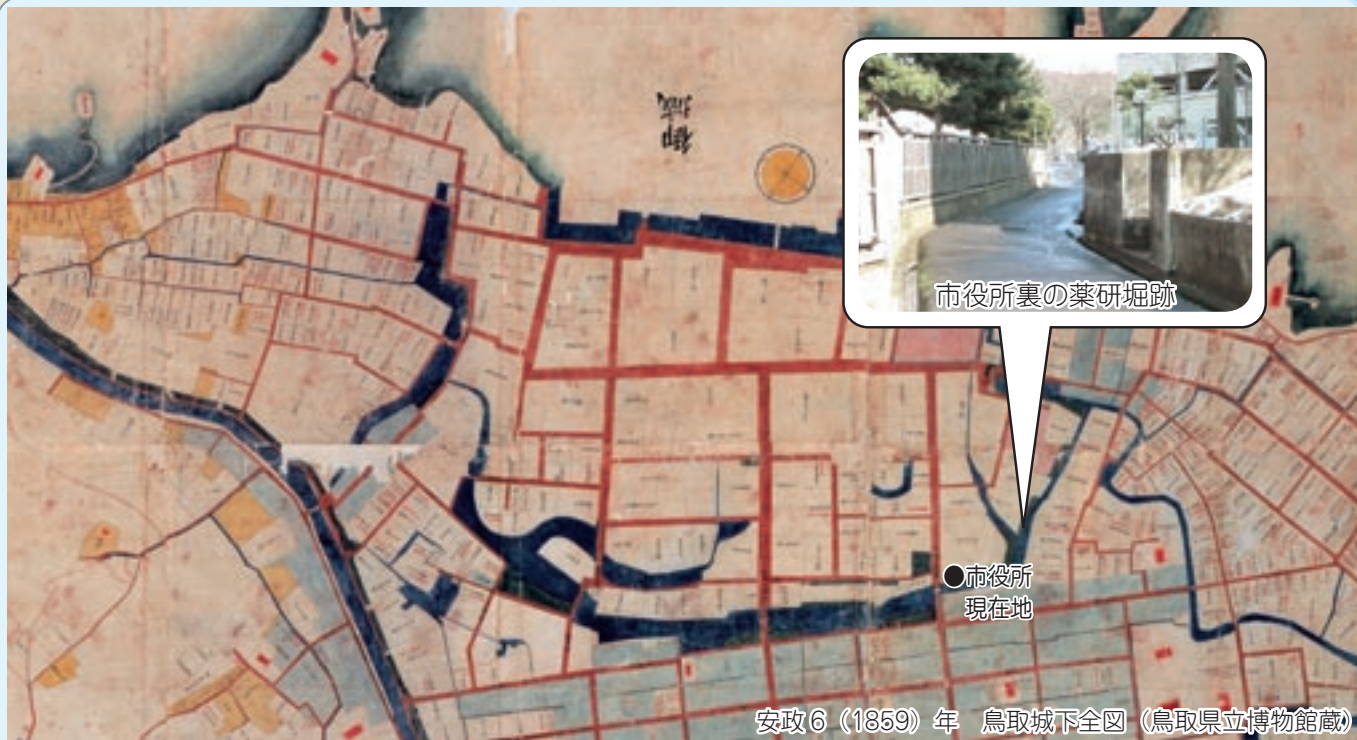


「とっどりの評判記」

第11話

なんでも

見えない薬研堀



安政6(1859)年 鳥取城下全図(鳥取県立博物館蔵)

こだまちゃん：今日は市役所に来てみました。いつきても車がいっぱいね。

やまびこ博士：今駐車場になっているところは、江戸時代には商家の立ち並んでいた上魚町という場所だよ。

こだまちゃん：じゃあ、市役所のある場所も昔はお店だったの？

やまびこ博士：いやいや、市役所は武家屋敷と、藩の「牢屋敷」の跡に建っている。駐車場と市役所の間にあるこの道が、商人などの暮らす地域と、武家の住む地域の境目になっていたんだよ。

こだまちゃん：へえ。

やまびこ博士：今は道になっているけれど、ここは昔は「薬研堀」という堀だったんだ。

こだまちゃん：「やげんぼり？」

やまびこ博士：本来は薬草をすりつぶすための「薬研」に似た、逆三角形の断面をもつ堀のことを「薬研堀」という。鳥取の薬研堀はそういった断面形ではなかったようだが、寺町から出合橋のたもとまで、まちなかを横切って続く長い堀で、武家屋敷区域と町屋区域を区画するものだった。

こだまちゃん：堀に邪魔されて、自由に行き来ができないわね。

やまびこ博士：堀には何力所か橋が架けられていたけれど、そこには惣門という門がつくられ、番人が

二人ずつ置かれていた。武士でない者は、通行証を見せないと通ることができなかった。

こだまちゃん：すごく不便ね。どうしてそんなふうになっていたの？

やまびこ博士：鳥取の町は、自然にできたものではなく、江戸時代前期に鳥取藩の中心地として人工的に作られたものだ。記録によれば、その設計は「日置豊前」という重臣によっておこなわれたという。当時は今と違い、藩にとって管理しやすいということが、町の設計の際には最も重要なことだった。

こだまちゃん：それで、お城や重臣たちの屋敷のある地域への出入りを監視していたのね。

やまびこ博士：しかし、この堀の存在は町の美しい景観を演出するものでもあった。堀を境に、山側は広大な区画に緑ゆたかな庭園をもつ武家屋敷。袋川方面はたくさんの人で賑わう商家地域。実にくっきりとしたコントラストを描いていたんだよ。

こだまちゃん：でも、今は全然面影がないのね。

やまびこ博士：江戸時代のうちに薬研堀は次第に埋まっていってしまい、近代には水はけが悪くなっていった。衛生上の問題などもあって、昭和はじめに下水道を整備するとき、暗渠化されてしまったんだ。でも、いまだに道路の下にはその流れが残されているんだ。

【佐々木孝文(鳥取市歴史博物館学芸員)】